

学生海外調査研究	
イギリスの大学における学習障害大学生支援の理論と実践：エクセター大学を事例に	
氏名 久島 桃代	ジェンダー学際研究専攻
期間	2014年7月1日～2014年7月9日
場所	イギリス デヴォン州 エクセター市、ヨークシャー州 リーズ市
施設	エクセター大学、リーズ大学障害学センター

内容報告

1. 本海外調査研究の背景

本海外調査研究の目的は、イギリスの大学の学習障害ⁱ学生に対する学習支援・生活支援の理論や方法論を明らかにすることである。日本でもごく最近、いくつかの大学でこの問題を抱える学生への支援が始まった。しかし、そのための方法論はまだ確立されていない状態である（斉藤・西村・吉村 2010）。そこで筆者は、日本の大学が学習障害を持つ学生を今後どのように支援していくかを見定めるためには、すでにこの支援が浸透・定着している、イギリスの大学の実践に学ぶ必要があるのではないかと考えた。イギリス式の支援の方法論やその成果を検討することは、日本の大学の今後の支援のあり方を検討する上で大いに参考になると考えたのである。

イギリスの大学で学習障害学生に対する支援がどのように行われているかを明らかにするため、筆者は、昨年まで約一年間、エクセター大学の大学院に留学した。そして具体的な研究の問いとして、この大学が学習障害をもつ学生に対して提供している支援の内容と、支援が学習障害学生の大学生活に及ぼす影響を明らかにすることにした。研究では、エクセター大学で障害をもつ学生を支援している AccessAbility という部署のスタッフと、AccessAbility から支援を受けている4名のイギリス人学生からインタビュー調査を行った。その結果、学習障害を持つ学生の多様なニーズに対応した AccessAbility の支援が、単に学生たちの学習や生活の困難を解決するだけでなく、学生たちの自信回復に結びつくものであることが分かった。

だが、日本に帰国し研究者たちとこの研究の成果を議論する中で、ひとつの疑問が芽生えるようになった。それは、現在イギリスの大学で行われている支援は、健常者の身体を暗黙裡に「ノーマル」とみなす「健常者中心主義」を助長するものではないだろうか、という疑問である。健常者中心主義 (Ableism) とは、健常者の身体を前提とした、実践や制度、社会関係のことを指し、障害者はこれらの仕組みによって周縁化され、抑圧され、そして社会から不可視化される (Chouinard 1997: 380)。イギリスで実施されている支援では、障害による困難を軽減するためのテクノロジーを提供したり、試験での特別措置を図ったりすることで、学習障害学生が健常者の学生と同じ環境で学習できるようにする。このような支援のあり方の根底には、健常者の学習スタイルこそが「ノーマル」であり、障害者はそれに合わせていく努力をすべきとする、大学や支援者たちの思い込みが潜んでいないだろうか。そして、支援を行うことで、学習障害学生の存在を、大学の中でより一層不可視化させていないだろうか。イギリスの障害者政策が整備される契機となった1960年代からの障害者運動や、これを母体として展開した障害学ⁱⁱの主張の一つが、健常者中心主義への強い批判 (オリバー1990) であったことを考えれば、今日のイギリスの大学の学習障害学生への支援は、こうした障害者運動や障害学の理念に逆境するものであるといえる。

イギリスの教育に直接言及したものではないが、同様の指摘はすでに日本の障害学によってもなされている。石川 (2002) は、障害者の社会的障壁の除去を目指すバリアフリー社会は、障害者が持つ差異をインターフェースによって吸収するが、このことが一層障害者の存在を社会から忘却させる可能性がある」と指摘する。また杉野 (2005: 116) も、障害者を社会的に隔離するのではなく、健常者と一緒と同じように生活するべきだとするノーマライゼーションの思想は、結局のところ障害を個人的な問題として捉えており、それを社会の差別や障壁として把握していないために、『障害者をありのままに受け入れる』ことの社会的責任が曖昧」となると指摘する。ここで石川が挙げているバリアフリー社会や、

杉野が挙げているノーマライゼーションは、イギリスの学習障害学生への支援の内容とほぼ同じとみてよいだろう。

筆者のこれまでの調査では、AccessAbilityで提供される支援の内容を詳細に分析し、それぞれの支援が学生生活のどの部分に役立つものなのかを明らかにしてきた。だが、一方で、それらの個別の支援の先にある、支援者たちが思い描く理想的な障害学生の大学生活像とはどのようなものなのか、という問題には十分に検討してきこなかった。支援者たちは、障害学生が支援を受けることで、健常者中心主義的な評価基準の中でも成功していくことを望んでいるのだろうか。そのために障害学生たちがもつ困難が結局は不可視化されてしまったとしても、仕方がないと考えているのだろうか。以上のような問題意識に基づき、今回の海外調査では、AccessAbilityが理想像として描く支援の形や、学習障害を持つ学生の学生生活のあり方について明らかにしたい。

このほか、これまでの研究で検討できなかった点がある。それは、ある程度障害学生のエンパワーメントに成功しているといつてよいこの支援ではあるが、それでもなお解決されていない問題や、限界はないのかという問題だ。そこで今回の海外調査では、これらの点についても着目したい。

さらに本調査では、エクセター大学での調査とは別に、リーズ大学にある「障害学センター」Centre of Disability Studiesも訪問する。リーズ大学の障害学センターは、障害学の一大拠点である。障害に関する大学院での専門的な教育、および調査研究の両方に力を入れている。本調査では、同センターで提供される大学院教育プログラムの内容やその様子、また本研究の目的との関連から、学習障害に関する近年の障害研究の動向について、同センタースタッフから話を伺った。

調査に際して、国際的な女性リーダーの育成を目的としている「学生海外派遣」プログラムの助成を受け、約1週間の予定でイングランド南西部にあるエクセター市と、北部にあるリーズ市を訪問した。

2. 調査内容

2.1. 調査対象・エクセター大学 AccessAbility の概要

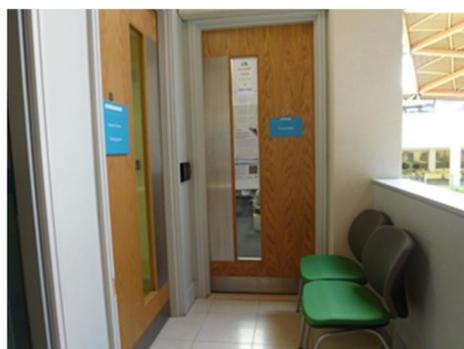
エクセター大学には学部生、大学院生合わせて約 19000 名の学生が在籍しており、うち 13%を留学生が占めている。人文科学、社会科学、理学、ビジネスなどのスクールをもつ総合大学である。

エクセター大学に在籍する障害を持つ学生に対して支援を行っている AccessAbility (以下「AA」) は、2002 年に開設されたが、実質的な支援は 1995 年から始まる。この支援が始まった背景には、同年にイギリス政府によって障害者の市民的権利を保障する障害者差別禁止法(DDA)が制定されたことがある。さらに 2001 年に「特別な教育的ニーズ・障害法」(SENDA) が制定され、高等教育機関における障害による差別が法的に禁止されると、障害学生を支援するための常勤スタッフの雇用がイギリスの各大学で促進され、これが今日の AA の体制を作り上げた。現在 AA に登録されている障害学生数は全学生の 1 割にあたる。

学習障害を持つ学生に対して提供される支援は、主に以下の 3 つに分類される。一つ目は診断書にもとづき試験時の特別措置を大学に要求したり、政府から支給される障害者手当を使用して、学生の学習に必要な機材の購手続きをしたりする支援である。これは、主として年度始めに行われる。二つ目は、学習指導や学習相談で、これは学生によって利用頻度は異なる。学期末試験や卒業論文の時期にだけ利用する学生もいれば、週に 1 度の頻度で利用する学生もいる。三つ目は、アスペルガー症候群の学生の生活全般の相談に応じる支援である。これも学生によって相談に来る頻度は異なる。いずれの支援を受ける場合にも、学生の方から自主的に予約をとり、AA の方から支援を受けることを強制することは基本的にない。



【図1 エクセター大学】
筆者撮影。



【図2 AccessAbility オフィス】
筆者撮影。

2.2. AccessAbility スタッフに対するインタビュー調査

本調査では、AA のスタッフで、障害学生の試験時の特別措置を大学に対して要求したり、障害手当を使用して学生の学習に必要な機材の購入の手続きを担当している、ディサビリティアドバイザーの A 氏にインタビューを行った。

2.2.1 AccessAbility が目指す支援のあり方

インタビュー調査では、報告書は単刀直入に、現状の支援の限界について質問した。従来の支援のあり方では、障害者は常に健常者と同じ形で授業に参加したり、試験を受けたりすることを強いられる。これは健常者中心主義を助長するものであり、このような体制下では、教育現場から阻害される学生を常に生み出しかねないのではないかと尋ねた。

この質問に対する A 氏の答えは、健常者の学生、学習障害を持つ学生、いずれにとっても学習しやすい環境を整えることが重要である、というものであった。学生ができるだけ多くの選択肢の中から、最も自分の状況に適した学習環境を選べるのが出来ればよいという。例を挙げると、大学に通わずに自宅で学習できるディスタンス・ラーニングを推進する、オンライン講義をさらに充実させる、等である。A 氏が学習障害者だけでなく、健常者学生にも言及したことには理由がある。それは A 氏によれば、障害を持つ多くの学生が、健常者の学生と同じ環境で大学生活を送ることを希望しているためだ。そのため A 氏は、健常者と学習障害者を物理的に隔てることなしに、また、学習障害者が特別に支援を要請することなしに、無理なく学習できる環境を整備したいと考えている。

以上の A 氏とのやりとりは、健常者の学習スタイルに障害者が適応していくことを前提とする、既存の支援のあり方を懸念する筆者に対し、学習スタイルそのものの選択肢を広げることで、学習障害学生の困難を軽減することを提案するものである。確かに、A 氏が述べた方法ならば、学習障害学生はいくつかの選択肢の中から最も自分の状況にあったものを選ぶことで、よりストレスの少なく、かつ健常学生と一緒に環境で学習することが可能となる。だが、この A 氏の提案では、前述の石川 (2002) や杉野 (2008) が批判していた、健常者が障害者の存在や彼らが直面する困難に無自覚なままであり続ける状態を、何ら変革できないのではないだろうか。そして、そのことの弊害は、支援者である A 氏の次の語りから明らかとなった。

(学習スタイルの選択肢を増やすことで、) 健常者の学生だけでなく、学習障害の学生にも、きちんと教育の機会を与えることが求められているのです。でも、それはあくまで理想の世界の話です。(中略) 社会には常に、高等教育機関で学ぶ学生は、優秀で支援など必要ないはずだ、という思い込みがあります。

つまり、社会、とりわけ多くの健常者によって構成される大学の制度が、障害を抱える学生の存在や彼らの困難に自覚的にならない限り、つまり大学の健常者中心主義が根底から覆されない限り、支援者は支援の根拠を大学に示すことすら難しいのである。けれども A 氏が先に挙げた提案からもわかるように、健常者中心主義を徹底的に批判することの必要性は、支援者の間でもそれほど意識されている訳ではないことがわかった。この部分については、今後も A 氏とのやりとりを続け、詳細に検討していきたい。

2.3. 障害学生に対するインタビュー調査

障害学生に対するインタビューでは、社会人大学院生で考古学を専攻している女性、B 氏から話を聞いた。B 氏は読み書きに障害を持つディスレクシア当事者である。筆者は B 氏とのインタビューを、昨年度から行っていた。B 氏は AA で「スタディ・スキル」と呼ばれる、支援者との 1 対 1 でのチュートリアルを時おり利用している。

インタビューではまず、B 氏が普段使っている、ディスレクシアによる障害を緩和するための機材を見せてもらい、それらをそれぞれどのように使っているのか、話を聞いた。今回の調査で機材についても話を聞いた理由は、昨年度の調査研究において、学習障害を持つ学生のなかに、AA からの支援のほかに、障害による問題を軽減する機材の有用性を挙げる学生が多数みられたためである。日本の大学では、学習障害を持つ大学生の様子を、そうではない学生が知る機会は限られている。筆者自身も、学習障害を持つ学生が普段どのような機材を使い、学習や研究を行っているのかを知る機会は、これまで全く持ってこなかった。そのため、事前にインタビューの際に機材を見せてもらえないか B 氏に依頼した。さらにこのインタビューでは、B 氏が現在の研究生活の中で困難に感じていることはないか、あるとすればどのような困難があるのかについて、質問した。

2.3.1 障害学生を支えるテクノロジー

B氏が持ってきたのは、「Read and write gold」、「Mind view」という2つのソフトウェアと、「Smart pen」というペンだった。いずれも、障害手当によって購入したものである。「Read and write gold」は、パソコン上で書いた文章を読み上げてくれる機能があり、読み書きに時間がかかるディスレクシアを持つ人が、文章の間違いをチェックするのに役立つ。「Mind view」は、研究のアイデアをマップ化し、整理するためのソフトウェアである。B氏が普段から使用するのは「Read and write gold」で、「Mind view」は、新しい研究プロジェクトに取り組み始めた時や、論文を書き始めた時のみ使用する。「Smart pen」は、会議やセミナーなど比較的少人数の人々が集まる場所で用いる。ペンを使用した後、ペンをパソコンにつなぐと自動的にペンで書いた内容をタイピングしてくれる。手書きの文章を後から見直すと判読できないことがあるB氏にとって、大変役立つ道具だ。

2.3.2 大学での学習・研究活動における困難

B氏は、現在の時点で大学での学習や研究活動の中で特に困難と感じていることはない、と述べた。「ディスレクシアはいつも私の中に存在している、けれど障害に対する対処法を、今の私は知っている」と、B氏は語る。B氏のこの主張は、以前B氏が筆者とのインタビューの中で語ったこととリンクしている。B氏はそのインタビューのなかで、AAの支援によって、ディスレクシアに対する理解が深まったこと、また「Read and write gold」や「Smart pen」などの、ディスレクシアの人々のための機械の存在を知り、読み書きの困難に対する対処法を自分なりに見つけ出すことが出来たと語った。つまりB氏は、困難に対処する方法をAAの支援によって見つけ出したために、ディスレクシアによる特性は依然として持ちつつも、それによって引き起こされる困難に悩まされることは特にないと答えたのである。

このほか、現在B氏は大学院の博士課程に在籍しており、授業に参加することはほとんどなく、普段は自分の研究のための自主学習を進めればよい状況であることも、彼女が現在の生活の中で特に支障を感じずにすむ大きな要因となっている。ディスレクシアであるB氏は、読み書きに困難を持つが、講義やセミナーに参加する必要がなければ、読み書きの困難はそれほど問題とならない。またB氏によれば、彼女が専門とする考古学は、理論的というよりもむしろ実践的な学問であり、他の分野と比べて文献を大量に読み込んだりする必要性が大きいことも、彼女がそれほど研究に困難を感じずに済む理由となっている。

さらにB氏は、ディスレクシアによる困難を抱えながら、他の学生と同じように奨学金のための面接を受けたり、論文を書くことについては、特に抵抗感を持っていないと語った。B氏によれば、将来大学の教員として学生を指導する立場に立った時に、読み書きが困難だから学生の指導ができないという「言い訳」は通用しない。それゆえ、学生の頃からディスレクシアによる困難への対処の仕方を知ることが大切だとB氏は考えているのだ。実際、AAの支援によってディスレクシアの困難への対処法を身に着けたB氏は、修士課程で非常に優秀な成績を修め、また博士課程ではその研究の価値が認められて、多額の助成金を得ることに成功している。

以上のB氏へのインタビューから明らかとなったことは、一概に「学習障害学生」といっても、また同一人物においてさえも、直面する困難の度合いは、彼らが大学のどの課程に所属しているのか、また何を専攻しているかによって、変化するということだ。このことは、支援の評価をより複雑にすると思われる。B氏のように、支援によって困難を乗り越え、学習や研究に目覚ましい成果を上げている学生は、現行の支援の在り方や、大学のシステムにこれ以上の変革を望む気持ちは小さい。だが、調査の中で様々な学生に出会ってきた筆者は、B氏の例が万人に当てはまるものではないことも承知している。ゆえに、今後の調査の課題としては、さらに何人かの学生にインタビューを行い、彼らの声を丹念に拾うことで、多角的な視点から現行の支援の在り方について評価していくことだと思われる。

2.4 リーズ大学障害学センターの訪問

リーズ大学障害学センターは、現在のイギリスの障害学の最大の拠点となっている。今回は、同センタースタッフで、障害とテクノロジーの関係性や、ジェンダーの視点からも論文を書いているアリソン・シェルドン氏にインタビューを行った。そして、障害学センターの経緯や、同センターの修士課程プログラムの内容、そして障害学における学習障害研究の最新の動向などについて質問した。

2.4.1 障害学センターの概要

リーズ大学障害学センター(CDS)は、現在のイギリスの障害学の最大の拠点となっている。その起源は、社会学・社会政策学部の中に、自ら障害者であり、障害学の旗手でもあったコリン・バーンズ(同大学スタッフ)が、障害研究ユニット(DRU)を1992年に設置したことにある。この研究ユニットは2000年まで、イギリス障害者団体協議会(BCODP)の研究部門も担当していた。1999年に現在の名称に改称している。CDSで修士の院生のためのコースが設置されたのは1993年で、現在、大学に通学しなくても学べるディスタンス・ラーニング式のコースも含めて、5つのコースがある。授業を担当す

る教員は、社会学・社会政策学部のほかに、法学やエンジニアリング、交通学など他学部からも構成され、学際的な視点から障害について考える内容となっている。また学生の興味関心も多種多様で、障害そのものについて研究したいと思っている学生もいれば、教育学や開発学の立場から障害の問題に取り組む学生もいる。その他、当事者として障害学を学びたいという学生もいるという。さらに、留学生の割合が高いことも、このコースの特徴である。今年も日本からも留学生が1名ここで学んでいる。

また障害学センターの研究は、センターの電子アーカイブスから無料でアクセスすることができ、このことが同センターの知名度を国内外で高めるひとつの理由となっている。このような電子アーカイブスが設けられた背景には、障害の問題に関心をもつ当事者や若い研究者たちのために、通常であれば一般の人がアクセスしづらい、障害運動の動向や関連事項の情報を与えられる場所が必要だと同センターが判断したためである。このことは、障害学の当初からの目的が、障害者の差別からの解放とエンパワーメントであった事とも一致している。

2.4.2. 障害学における学習障害研究の動向

障害学においても、学習障害に関する研究は増加傾向にある。特に、学習障害当事者である研究者による研究が積極的に発表されている、と、シェルドン氏は具体的な研究者の名前を挙げながら、教えてくれた。また、障害学センターの電子アーカイブスでも、学習障害に関する研究にアクセスすることができ、この研究に関心を持つ読者が、著者に連絡を取ることも可能だという。学習障害者自身が障害研究を行っていくことは、困難がないわけでは決していないが、意義がある、シェルドン氏は考えている。なぜなら、研究者自身が学習障害当事者であることは、研究調査の際に他の当事者たちの経験を理解する際に非常に役立つからで、「障害者のための」研究を目指してきた障害学の理念とも、この考え方は一致している。

3. 今後の課題と予定

本調査のインタビューから得られた、AA スタッフや障害学生の語りをさらに深く分析し、また今後の補足調査と昨年までの調査の結果と合わせることで、エクセター大学で実施されている学習障害学生のための支援の成果と限界について明らかにしていきたい。本調査で得られたデータは、エクセター大学における支援に関する部分は障害学会『障害学研究』に、CDSでのシェルドン氏とのやり取りの部分は、現在人文地理学会『人文地理』で査読中の論文「空間・身体・『障害』—英語圏地理学における障害研究の動向から—」に盛り込みたいと考えている。

注

ⁱ 学習障害とは、知的な遅れがないにもかかわらず、学習面で何らかの特異な困難を持つことをいう。そこでは、知的発達の状態と学力との差（アンバランス）が特に大きいこと、すなわち、知的発達には特に問題がないにもかかわらず、それに応じた学力がみられないことが学習障害かどうかを判断する基準となる（柘植 2002：3）。学習障害の代表的なものとしては、読み書きに困難を持つディスレクシアがある。ただしイギリスで学習障害という場合、ADHD（注意欠陥・多動性障害）やアスペルガー症候群などの発達障害なども含めている場合があり、実際にはかなり広い意味で使われていることがある。

ⁱⁱ 障害学は、1960年代から1970年代にイギリスとアメリカで起きた障害者運動に端を発するアカデミックな動きである。そこでは、それまで医療や福祉の領域の問題として扱われてきた障害者の困難が、社会的な諸制度のなかでいかに再生産され得るものなのか、ということが批判的に検証される。

参考文献

- 石川准（2002）「ディスアビリティの削減、インペアメントの変換」（石川淳・倉本智明編著『障害学の主張』明石書店）
- 斎藤 清二・吉永 崇史・西村 優紀美（2010）『発達障害大学生支援への挑戦—ナラティブ・アプローチ とナレッジ・マネジメント』金剛出版
- 杉野昭博（2007）『障害学—理論形成と射程』東京大学出版会
- 柘植雅義（2002）『学習障害（LD）—理解と支援のために』中公新書
- Chouinard, V., 'Making space for disabling differences: challenging ableist geographies', *Environment and Planning D: Society and Space*, 15-4, 1997, pp.379-390.
- Oliver, M.(1990) *Politics of disablement: A Sociological Approach*, Basingstoke: Palgrave Macmillan. (三島亜希子ほか(訳)2006『障害の政治』明石書店)

指導教員によるコメント

久島桃代さんは一昨年前から1年間、イギリスの大学院に留学したことを契機に、イギリスを中心とする英語圏の障害運動や障害研究に関する理論的研究と、障害学生のための高等教育政策に関する実証的研究に着手しました。前者の理論的研究に関しては、すでに論文にまとめ、学会誌に投稿しているところです。今回助成を受けて実施した調査は、この理論的研究によって明らかとなった、英語圏の障害研究の視点や方法論を用いた実証研究となります。人文地理学においては障害に関する研究は他の分野の研究と比較して数が依然として少なく、とりわけ久島さんが着目している学習障害の問題は、ほとんど取り組まれてきませんでした。また、海外の障害研究の動向や障害に関する社会的取り組みについても、最新の状況について知ることは困難でした。そのため、本調査を研究論文としてまとめ発表していくことによって、これらの不足が補われ、今後日本の地理学的研究のなかで障害に関する研究が増えていくことが期待されます。

(お茶の水女子大学院人間文化創成科学研究科 (人間科学系)・熊谷 圭知)

Supports for university students with learning disabilities in the UK

Momoyo KUSHIMA

This study comments on inclusive educational theories and policies within English Higher Education, with reference to both practices of university disability support staff and experiences of students with learning disabilities (LD). By doing this, I will aim to find clues about improvement of university supports for students with LD in Japan. In this research, I focus on the disability support service in the University of Exeter. I undertook individual interviews with the staff and one university student with dyslexia. As a result, it is revealed that ableism imbued with university prevents these students from getting enough educational opportunities yet it is not paid much attention to by the staff.